

# 地頭の領主層について

——特に勢力の限界を中心として——

北 西 弘

## 一

一般に、古代と中世を對立的に定式化して考える傾向が強いが、古代遺産の歴史性を重視する限り、それを單なる對立と考える事は誤りである。たとえば、中世に於ける農民層の惣村結合やその抵抗性は、從來の如く高く評價されてよからうが、然しそのため、これを孤立的に把握し、その慣習や傳承性の意義を看過する事は正しくない。

この點、本稿において中世形成史上、重要な役わりを演ずる地頭領主層をとりあげ、それと前代遺産の、一・二聯關を考察したい。

さて我々は今日、地頭領主層、就中その領主制確立

に關する數多くの研究成果をもっているが、その内特に重視されて來た問題は、領主化の限界についてであつた。日本封建制成立における緩慢性の基本を、こうした限界の中で具體的に實證しようとしたからに外ならない。然しこうした問題を究明する爲にとられた研究方法は、概して中世諸權力をめぐる政治史あるいは社會經濟史的方法が多く、それを思想史や文化史の面においてとらえる事が少なかつた様に感ずる。

たとえば、若狹國太良庄において、御家人を領家（東寺）末代までの御敵と非難した百姓の立場を、領家との古代傳統的な關係において考え、その協力を百姓側の奴隸的卑屈さにもとづくと説き、地頭の歴史的課題は、こうした情勢を完全に破壊し、在地に新たな領主制を樹

立する事にあつたと評する見解がある。<sup>①</sup>

然し此處にいう奴隸の卑屈さは、そうした觀念的な圖式論からはなれ、その由來を思想史の上から説明する必要があるのではなからうか。又、地頭を古代的支配に對する破壊的存在としてのみ表面的に評價せず、地頭自身その内部に傳承する古代思想を尋ねあかす事が問題究明において、より必要な事ではあるまいか。

古代的支配體制の座が中世的支配の矛盾の中に溫存される事は論をまたないが、そうした矛盾の基底に人間の傳承思想が根強く作用している事を忘れてはなるまい。人間存在を規定するものとして、現實の諸事象を重視するあまり、それがもつ傳承思想や慣習を看過するならばその歴史的立場はゆがめられる事となるであらう。以下こうした事象について一、二試論を提する事にしよう。

## 二

中世武家權力を代表する地頭が、在地にその權勢を擴張しようとする場合、様々の障礙に直面せざるを得なかつた事は諸史料の示す如くである。

然らばそうした地頭領主化の障礙の限界は、一體如何なる規定條件にもとづくものであつたらうか。先述した

如くこれについて我々は、先學の殘した多くの成果をもつているが、それによると、その限界性は大別して以下の如き理由によると解されて來た。

- (1) 在地構造に依つて規定される限界
- (2) 幕府もしくは領主層相互間の政治的關係による限界
- (3) 莊園領主側の新しい支配體制にもとづく限界等々である。

先ず在地構造に依つて規定される限界とは、在地に於ける土地經濟の未進歩性に起因するものである。即ち名田經營が、名主の寄生地主化が實現し得ぬ様な低い生産力に對應する經營様式である限り、地頭もそうした様式にしばらく一定の規模以上には成長し得ぬ状態にあつた。然もこうした經營様式のもとに、なおかつ名田の規模を擴大しようとする場合は、より多くの下人所從の獲得や或は賦役勞働の徵發を必要としたが、それは名主層の成立、奴隸解放という歴史的 direction に逆行するものである。爲に強固な抵抗を受けねばならなかつたというのである。然も又、百姓名の侵略によつて行われる地頭名の擴張は、その非法のためかえつて農民層を莊園領主側につかしめ、兩者合同の強力な抵抗を受けねばなかつたといふのである。<sup>②</sup>

たしかに、莊園領主側に對抗しつつ、一方かかる動向下にある農民層を支配し、もつてその領主化を實現すべき地頭領主の立場は、以上の如き構造的條件を克服するにはあまりにも困難であつた事は認むべきであらう。

次に、幕府若しくは領主層相互間の政治的關係に起因する限界についてであるが、先ずこれは本質的には幕府政權の弱體性に通ずる限界である。即ち幕府は古代政權の基盤たる莊園制を容認し、それ自體大莊園領主であるという妥協的寄生的立場にあつたが、こうした態勢は必然、御家人地頭の土地押領や非法を極力停止せしめ、舊莊園領主の所領安堵として表われる。この事は、室町時代に至つても、守護勢權の分國強化により、その立場の相對的低下を恐れた幕府が寺社本所の所領を保護し、在地における名主以下の守護被官化を強く停止せしめた事實の中にもうかがい得る。

かくの如き幕府政權下に於ける地頭領主層の自己形成は、ために全く孤立的になり、その領主化にいちじるしい限界性を帯びる事となつたのである。<sup>③</sup>而して以上の如き政治的矛盾の中に、その限界性を考えると共に一方又在地における莊官的領主の領主化が、そのいちじるしい限界となつた事も忘れてはならない。即ち、安田元久氏

は封建領主化のコースをたどる地頭層に對し、從來預所雜掌等が古代的な莊園支配下における一勢力として固定的に考えられていた事を疑い、兩者の社會的性格が決して異質的な領主化をたどるものではない事を強調し、下地中分も、從來云われる如く地頭權の伸張と單純に考へべきものではなく、それは地頭の成長が預所雜掌側の領主化運動と衝突した事の史徴に外ならないとみている。<sup>④</sup>而してこうした在地における二つの領主層の相剋という點から、必然、莊官的領主層の領主化が地頭領主化に一つの限界を與えていたという事も考えてよいのではなからうか。

次に莊園領主側の新しい支配體制にもとづく地頭領主化の限界についてであるが、これについて若狹國太良庄の例が好適としてあげられる。即ちそれが示す如く、在地の構造變化にともない、莊園領主は舊來の支配體制を轉換し、地頭層との對立のはげしい在地領主(莊官的領主層)や名主を積極的に自己の側に組織する政策をとるに至る。具體的に言えば、從來の支配體制であつた名別支配より轉換し、名分割の進行の上より成長して來た農奴的生産者を直接檢注帳にくみ入れ、賦課の單位としてとらえる方式をとり、一方名主層を沙汰人として特權

的地位を與え、又地頭領主化の對抗手段として雜掌の在地領主化を容認するに至るのである。こうした新體制の樹立は、在地諸層、就中農民層を自己の側にひき入れ、もつて地頭の領主化に限界を與えたと考えるのである。

以上、從來提示された地頭領主化の限界についての諸見解を示したが、いずれも具體的地域に即しての政治的社會經濟的研究成果として、高く評價さるべきものである。

然し思うに、こうした諸限界の他に、地頭領主層において思想的な限界が多分に介在すると考えるがいかかであらうか。一體地頭領主制は理論的に云つて社會構造のレボリューシオンを指向すべきものではあるが、事實それがレフォメーションの域を脱し得なかつたという事は、勿論如上の諸條件にもとづくと言わねばならぬが、然し、より本質的に言うならば、それ自身いなく前代的思想の克服を、十全にはたし得なかつた事に依ると考えねばならない。以下、具體的には加賀國上林郷の地頭大桑玄猷をとりあげ、もつてその領主化における思想的限界を考察する。

### 三

此處にいう加賀上林郷とは、中林・下林とともに、和名抄にいづる拜師郷（波也之）の一地域で、現在石川郡野々市町に屬している。<sup>⑤</sup>

白山に源を發する手取、大日、直海谷の諸川は、山内地帯（江津並口直海）で合流し、もつて石川平野を形成するが、當郷はそうした石川平野の東南部に位置し、富樫・郷の二用水に恩澤される肥沃な地域である。

さて當郷（知氣寺）には既に治承壽永年間、富樫氏の一族林六郎光明が館し、權勢をふるつていたというが、その土地知行や政治形態については不詳である。一方、當郷は古くより社領として白山比咩神社の支配をも受けていた。今、社領としての起源は明了を缺くが、「三宮古記」に依れば既に徳治年間には社領として支配されていた事は確實である。而して、曆應年間における所領規模は五町にわたつており、貢納米の用途田は、大般若田、法華不斷經田、彼岸田、燈油田、新十一面寺田、三宮燈油田等に區分されていた。然もそれら各田は、更らに各領主に分割され、分別上納されていた。これを圖示すれば左の如くである（三宮古記）。



曆應年間（一三三八） 林郷に於ける白山所領

	林 郷			計	林 郷 總計 味智郷
	上 林	中 林	下 林		
大 般 若 田	2.8	3.0		5.8	6.2
法華不斷經田	0.5	0.3 (15代)	1.0 (35代)	1.8 (50代)	2.8 (50代)
彼 岸 田	0.4	0.4		0.8	1.5
燈 油 田	0.4	0.2		0.6	0.6
新十一面寺田	0.5	0.2		0.7	1.2
鐘 打		0.3		0.3	1.1
三 宮 燈 油 田	0.4	0.3		0.7	2.0
馬 頭 堂		0.3		0.3	4.6※
(計)	5.0	5.0 (15代)	1.0 (35代)	11.0 (50代)	20.0 (50代)

(附圖一)

(註一)

圖は三宮記所收  
「惣勘合免田員數事」による。

(註二)

單位は町を示す

(註三)

馬頭堂田、味智郷分四町三段は(註一)史料に明記していぬが、今、味智郷總分九町より大般若田その他の分を差引きてその地積を計算した。

彼岸田領主並分米				彼岸田等各田總高	領 主	總高
領主	總高	林郷負擔	分米		長 吏	0.8
長吏	0.3		9斗		院 主	0.5
院主	0.3	0.1	9〃		大 勸 進	0.5
大勸進	0.2		6〃		大 先 達	0.5
行事	0.2	0.2	6〃		大勸進次藤	0.2
夏一	0.2	0.2	6〃		行 事	0.6
次藤	0.2	0.2	6〃		夏 一	0.6
次藤	0.1	0.1	3〃		夏一次第一藤	0.5
計	1.5	0.8			次第二藤	0.4
					次第三藤	0.2
					次第四藤	0.1
					(以下略)	

(附圖二)

(註一)

圖は「彼岸切符日記」等による。

(註二)

單位は町を示す。

(註三)

「彼岸切符日記」は林郷の彼岸田八段を總て上林負擔と記入しているが、事實は上林四段中林四段なる事、附圖一に明なれば、その誤謬なる事は明白である。

(註四)

白山宮上納彼岸田の總高は、上林郷味智郷の一町五段と比樂の三段、北安田保の二段、計二町である。

さて、こうした知行地は然らば如何にして經營されていたのであろうか。三宮古記に

「一彼岸田上分事 段別三斗宛 沙汰所納之  
小破修理加之

寺中五時講田事 院主分大勸進分行事

貳段拾五斗 地本在別石五人分以上二  
石七斗米執段別一石三斗

卅五代 地本八幡村在之  
段別一石三斗

一段廿代早田 作人 新兵衛

卅代 早田 作人 別所孫

五代 作人 井門

#### い上別所分

卅代 作人 面輪

五代

とあるが、これに依れば零細な小地片が諸作人の手で耕作され、それぞれの名目で課役されていたものと考ええる。然も同記に「彼岸一貫百五十此内五十沙汰人得分」とあるが如く、こうした作人は、沙汰人を通じて本宮領主に支配されたと推定される。

以上に依つてほぼその経営形態を想像出来るが、在地農民はこの外に、臨時祭田、安居田、仁王講田、等々諸種名目の課役を受け、強固な白山支配をうけていた様である（三宮古記）。

さてかかる動向にある白山社領に、鎌倉以降武家地頭

の領主化が推し進められようとするのであるが、以下その事情を當郷地頭大桑玄猷をとりあげて考察する。

先述した如く、當郷は既に富樫一族林六郎光明の居館地で、白山神社に支配されつつも猶、武家權力の侵蝕を受けていた。

然も當地は、富樫一族の諸勢力が最も密集した注目すべき地域に位置する。<sup>①</sup>

かかる地に居館する大桑氏とは、尊經閣文庫大桑氏系圖に依れば、光明——季光——實光 太桑  
藤次——知光——師光——光友——光顯——光貞——光勝と次第し、富樫系圖に依れば林光家——光明利光——光行（佐貫氏）——光則（佐貫氏）——信光と次第し共に符合せず明確を缺くが、元來その本據は石川郡大桑であつたらしい（三州志故墟考卷之四）。然らば上林郷地頭としての大桑氏は何時如何なる形で當郷に入部して來たのであろうか。

これは恐らく當氏の祖、林氏が既に古く當地に居館した緣故に依つたものであろう。更らに白山宮庄嚴講中記錄によれば、嘉祿三年四月廿七日大桑讀岐次郎光行が、白山神主職に補せられ、天福二年八月十八日還補三度神主職に補任されているが、こうした白山社の職所有が社

領としての當郷に、大桑氏が居館するに至る重要な条件となつたのではなからうか。

而して元來富樫氏並びにその諸流が、白山社における坊官或は神主職としての位置づけが確立し、その領主化との矛盾が表面化しない間はよいとしても、爾後に於ける具體的な領主化の内外要求に依つて、ようやく白山社との摩擦を生ずるに至る。この意味で、觀應三年上林郷大桑地頭に對する白山神興振りは重視さるべき史徴である。即ち當年四月四日、地頭大桑禪門玄猷が白山祭禮御供米を未進したという理由によつて、白山神人は神杵を捧じて地頭館へ亂入、大衆數千人已下の軍兵は八幡・三宮・大宮の三鉢の神興を振りあげ、上林郷を散々に焼拂つている。<sup>⑨</sup>

抑々こうした白山社の神興振りは、その史實の明白なるもの前後九度を數え得る。即ち

(一) 安元三年、國司師高、目代師經に對す(源平盛衰記、

平家物語、百練抄)

(二) 嘉祿二年(後述) (白山宮庄嚴講中記錄)

(三) 嘉禎元年(後述) (同右)

(四) 建長六年(後述) (同右)

(五) 延慶二年、仁和寺益信、大師號宣命に對し山門より

被命

(六) 元亨二年(後述)

(同右)

(七) 康永四年、天龍寺建立に關し山門より被命、但し不行 (太平記卷廿四)

(八) 觀應三年(前述)

(白山宮庄嚴講中記錄)

(九) 寶徳三年、顯末未詳比叡山上に振上ぐ(南朝紀傳)

以上九度(但し一度は不行)の神興振りの内、その本寺延暦寺との關係においてなされたそれは別として、此處に對地頭關係の神興振りは前後五度にわたつて見得る。

(一)(二)(三)(四)(五)

即ち(二)の場合は富樫一流、豐田光成三男成舜が御供田地頭職に補された事に對し

「寄進已後九十餘年全不交他領之處云々」と言上したが、裁許なかつた爲に行われた神興振りであつた。これは社領の一圓知行に對する武家地頭層の領主化傾向を内容としてのみ解し得る事實であらう。(四)の場合もこれと同じく、國司通成が八田郷庄號並に山下郷地頭時光請所の沙汰を爲した事に對するものであつた。かかる目的に依る神興振りに對し、(三)の場合は臨川寺領大野庄の地頭代官惣公文等が、造白山料米段別五升米を難澁した爲のそれであり、(六)の場合は、河内庄地頭が、舊規に背いて

末社別宮院中に、公私の公事をあて、院中知行の山林等を點定した事に理由するそれであつた。これらは先述した代の場合と共に、在地における地頭領主層の動向を具體的に示唆するものである。

然らば、以上の如き相次ぐ神興振りに對し、地頭領主のつた處置は、果して如何なるものであつたろうか。

この問題こそ、地頭層の封建領主化過程を明かすための具體的内容をもつものと考えから、以下觀應三年における上林郷大桑地頭に對する神興振りを問題としてとりあげる。

さて、祭禮供米未進の故に白山神人、大衆の亂入を受け、神興振り棄てにあつた大桑玄猷は

「様々大勘<sup>ニシテ</sup>神馬拂物神人死去、地方八町不論一義沙汰」する事を誓い、ようやく神興を歸山せしめ得たが、その後更らに神興新造のための料足百石百貫を白山神社に獻じ、(白山宮庄嚴講中記錄)又、白山比咩神社文書に依れば神興振りを受けた翌年、文和二年八月より以降、盛んにその知行地を白山宮に寄進している。今便宜上文和二年八月十一日より延文元年八月廿五日に至る間に寄進された名田並に地積を圖示すれば左の如くである。

名	寄 進 地 積	計
大米重名	2.20, 5.30, 2.20, 7.20	17.40
東得用	0.40	0.40
福王名	3.30, 0.20, 1.15	5.15
七郎丸名	7.30	7.30
惣太名	0.15, 2.0	2.15
清藤名	21.40,	21.40
秋永名	32.20,	32.20
眞貴名	9.0, 4.30, 0.20,(賣渡2.0)	14.0
相四郎名	3.0,	3.0
		10町5反 (賣得2反) ヲ入レ10町7反

(附圖三)

(註一) 單位は段を示す。

以上約十町七段にわたる土地寄進である。而して此處で、こうした寄進地が、地頭大桑氏の所領において一體どれだけの數的位置をしめたものであるか、又この土地所有の成生事狀や經過は如何であつたか、更に又こうした土地寄進の根本理由は何であり、寄進後における土地經營と大桑氏の關係は如何であつたかという事等について尋ねられねばならないが、今は全くそれに答うるだけの史料にめぐまれぬ。然しここで特に注意しておかね

ばならぬ事は、例えば延文元年七月十六日付「加賀國上林郷内田地坪付事」や、同年同月廿六日付「白山長吏御坊御免田上林郷下地坪付帳」<sup>⑩</sup>に依ると、寄進地の所在が、極めて零細なる地片をもつて散在するという事である(附圖三参照)。この事は附圖一、二に示した事實と共に、名田の分割事状やその構造的複雑さを示すに充分である。

抑々當郷の名田については附圖三に示した如く、九名の所在が明であるが、今これを田地坪付や寄進狀所載の四至等(白山比咩神社文書)によつて考えると、大凡附圖四の如く位置づけうる。

さてこのように位置する名田が、先述した如く、極めて零細な地積に分割支配されている事態は然らば一體、如何なる事を物語るものであらうか。

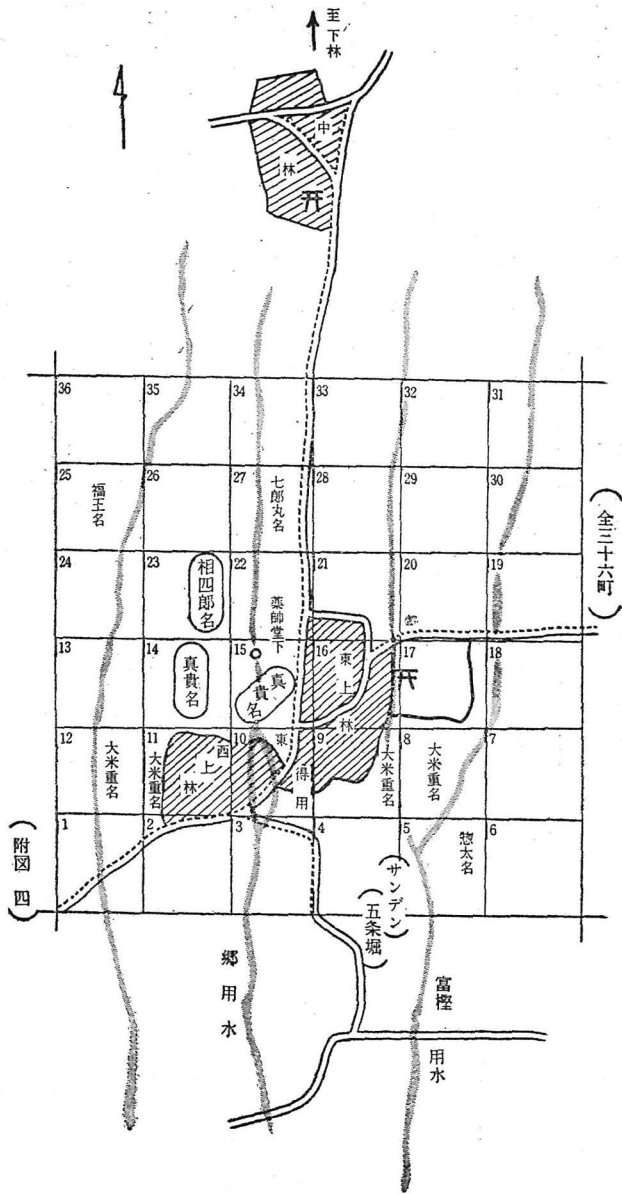
勿論こうした名田の細分化は、その可分割性にもとづき、當時においては既に一般的傾向であり、その土地支配を極めて複雑多岐ならしめていた事は申すまでもない。

而してこのような在地構造の上に、白山神社と大桑地頭がその土地支配を競わんとする場合、かかる名田の分解、小作制の成立という傾向は、その上に封建領主化を

すすめんとする地頭領主層の一般動向からいつて、大桑玄猷にとつて、より好條件な構造であつたと云わねばならない。

然るに猶、地頭大桑の領主化が頓挫するのは一體、如何なる理由に依るのであらうか。此處において、白山神社の地域的接近に依る直接支配と壓迫が検討されねばなるまい。即ち白山の土地支配における宗教的思想的壓迫である。神に對する前代よりの傳承觀念が、名主や地頭領主にとつて、その可能な前途を自らの手でつみとらしめたものと云わねばならない。時代的にみて、一般地頭層がその領主化に最も構造的限界を感じていた頃、白山との身分關係に依つて比較的スムーズに領主化をすすめたと考えられる大桑氏が、一般地頭の領主化が、在地の構造推移に依つて軌道にのせられた頃に頓挫するという事實の中に我々は、政治經濟と共に力強く歴史に作用する人間の思想性を感じとらねばなるまい。

先述した如くその近在に、同族の武力的背景をひかえながらも、猶觀應の神輿振りにみた大桑氏の敗北は、かくて我々に、武力的非法をあえて阻止せしむる思想的ブレーキの存在を感じしめる。元亨二年の、河内地頭代に對する白山の神輿振りにおいて、神社側は



(註一) 印は地所推定名。

(註二) 眞貴名、相四郎名の推定は白山比咩神社文書、延文元年七月十六日付「上林郷内田地坪付事」に記載する四至に依る。

(註三) 大米重以下の地所確定名は、白山比咩神社文書「白山長吏御坊御免田上林郷下地坪付帳」により記載す地所不明名田に清藤名、秋永名の兩名田あり。

「對地頭 難致敵對間五月三日寅剋神輿等 頂載衆徒等令離山云々」(白山宮庄嚴講中記錄)と記錄する。又、

正長元年には、能登一宮氣多社の神官供僧等は、志雄保地頭飯尾重清の代官和田入道紹賢が、赤藏神林伐採

(羽咋郡)

權に關して幕府に訴えた事に對應し、先に地頭方(當時地頭は得江藏人三郎朝通)より提出された和與狀文言にもとづき、地頭方に中分提供した四町八段九の和與免田を悔還せしめんと主張し、然も裁許なき場合はあえて神與振りをなさんと次の如く警告している。

〔上略〕(地頭代) 倩案彼非法

當時奉輕神威云 未代瑕瑾云

難測神禁間 社家愁訴何事如之哉。若滯御裁許者 任證驗之旨 如先條可奉成 神與御幸者也(以下略)と。

(氣多神社文書)

かく白山神社側が 地頭層に對する武力的對抗の手段を失つた現實自覺にもかかわらず、最後の切札として、又氣多社が地頭の非法を阻止せしむる最善の手段として共に神與振りに望をかけているこの事實は、そのまま裏面に、當時における地頭の畏怖の神與觀念を物語るものではあるまいか。

#### 四

前項來、地頭大桑禪門玄猷の領主化が、白山の神與振りを契機として頓挫した事を述べて來たが、ここではそうした神與振りが、地頭の勢力的伸張に、如何程の限界

性を與えたかを、當時一般の神木神與觀を明かす事によつて推察しよう。

從來、白山のみならず南都北嶺の神木・神與に關する研究は少くなかつたが、然しそれらは概して訴訟事項に對する現象的研究が多く、従つて必然それを、暴力的に評價する傾向が強かつた様である。然し他面、神木神與振りを受ける側の思想的立場換言すればその神木神與觀が看過されるならば、そうした評價はその歴史性を客觀的に語りつくしたものとは言えまい。概念的に云つて神木神與振りは、その宗教權威を權威として畏怖する對者の宗教的觀念を前提としてのみ、效果的に表現されるものと考えるから、そうした面の研究こそゆるがせに出來ぬと考える。

例を春日の神木にとつてみると、既に永島氏はその歴史的興亡について、その著

「春日社家日記―鎌倉期社會の一断面―」において

「かかる宗教的制裁も、社寺領の母胎即ち莊園制が漸く新興武士の擡頭によつて動搖を生ずるに至つて漸くその効果が薄らいで來た」と解釋し、然もその理由を「勿論中世は宗教の時代であつて一般民衆も熱烈な宗教への歸依心もあつたが、こと生存の問題に關すれば或程度之を

無視する態度も執つた。神木犯穢という事は宗教心の上からは忍び難い事であるけれども、生存が危殆に瀕した場合には止むを得ざるものでもあつた」と述べている。

然し神木による宗教的制裁の衰亡を、かくの如く新興武士の擡頭において考へる事は果して正しい事であらうか。問題は衰亡の歴史的內容であるが、それを考へる場合、先ず神木神輿自體の宗教的權威とそれを行使する神人等の組織を混同して解釋してはならない。この點、神木神輿振りの現象的衰亡は、ある場合、神人等の組織的統一の衰退を語るものであつても、その權威失墜を示すものでない場合が多い。又、神輿振りに對する神社側の宗教的反省も、その衰退に大きく影響したのではあるまいか。嘉祿二年、白山における社官の神輿振りに對し白山宮庄嚴講中記録は、

「一略―理不盡奉振神輿之條、奇代未曾有之妄行也、仍宮保神主氏盛被闕官了」

というが、これは組織の不統一と共に、神輿振りに對する反省を語るものであらう。

更にいわれる所の神木犯穢の問題も、たとへ武士や農民層の感情的刹那的犯穢があつたとしても、それを以てただちに宗教的制裁に對する思想的武力的克服と斷じき

る程早計であつてはなるまい。永島氏はさらに、永仁三年と正安三年の神鏡奪取事件<sup>⑩</sup>をとりあげ、前者は神鏡を手中に歸す事に依り神威を蒙らんとするものであつたが、後者は純然たる春日社、興福寺に反抗した惡黨のいやがらせであり、武士が武勇に任せて神威を恐れず、これを蹂躪し、傳統勢力に反抗したものであつたと評價している。然しこれも又、その犯穢性に對する具體的立證に缺けたるかの觀がある。

所詮、氏の如く神木神輿の衰退を、若し新興武士の擡頭をもつて規定づけようとするならば、云う所の犯穢事件を内容的に確證する必要があるし、又神木神輿を克服する武士の立場や思想を動的に明かさねばなるまい。

然らば、中世における神木神輿觀は、具體的には如何であつたらうか。

思うに、永享五年叡山の神輿振りにあたつて、還俗將軍義教は軍兵を加茂河原に配し、これを要撃せんとしたが、然も猶月藏坊が自己を呪誼していると聞き、滿濟に呪誼拂いの祈禱を行わせているが、<sup>⑪</sup>こうした將軍の意識こそ重視すべきではあるまいか。そしてこの意識こそそのまま神輿振り棄てにおびえ、その造替に鞠躬たりし事態の基礎をなすものではなかつたらうか。そして、こう



した基礎に立つ限り、それがなす抵抗、即ち傳統勢力に對する反抗や克服は根底的にはたし得るものではなかつた。

而してかかる抵抗と畏怖の觀念は、中世における一般の傾向であつて、禁祕御抄(下)に

「一、奉振神興仰諸陣被禦 又問諸門、正<sup>シ</sup>神興進給之時 天子下地暫不復本座、諸卿已下作法、大略同内裏焼亡之儀」

という事や康永三年八月、清凉殿に御す花園帝が、衛門府の陣中に振り棄てられた神興が東寺八幡に遷らんとする時、庭上に下りてこれを拜した事(園太曆)、更らに正和三年閏三月富小路西に振り棄てられた神興を、同帝は毎日庭に下りて拜したという事(花園院御記)等は總て如上の事狀をうらがきするものに外ならない。

然もこうした事狀は、春日神木御入洛見聞略記に

(應安)

「同六年九月二日自酉刻至寅刻、大風穿山、拔樹了昔永祚風未可及今度云々 神木御在洛中非常儀歟不可説

々々々」

と云い、又貞治四年における連々の火災や疾病流布について大乘院日記目錄第一には

「依神木事 天下不吉事不絶」

と評し、さらに應安七年十二月十七日の同記事にも

「(神木) 御在洛中天下不吉條々數多也」と云うが、これらに依つてもうかがえるが如き、呪詛的現報的神木神興觀によるものである事は申すまでもない。

さてこの様な觀念は又當期に於ける神領觀にも如實に示される所である。既に中世における寺社領に關して石母田正氏は、

「東大寺にとつて庄園土地は、作人に給與しうる様な客體としての土地ではなく、嚴密には東大寺のものでもなく、作人のものでもない。神佛の神聖不可侵の土地と考えられていたのであらうと思う。藥師寺領が藥師八幡の支配する土地であるといわれる如く、神が土地を支配するという觀念は中世寺社領では珍らしいものではない」といつてゐる。<sup>13)</sup> こうした事は、中世寺社領文書にいちじるしく特徴的な傾向である。現當二世所願成就を標榜する土地寄進において、「爲佛陀寄進云々」(近江觀音寺文書一〇・一一・一二)と云い又「於左右致煩輩者可蒙不孝佛敵之科者也云々」(同文書三九)「子々孫々相續之百姓誰可背三寶之冥助哉云々」(同文書四〇)というが、これは、單に寄進狀の常套語として等閑視し得ぬ内容を含むものである。

他ならぬ本尊に對して土地を寄進し、それを本尊田と名付け、もつて後生菩提を祈らんとするこうした傾向は(近江觀音寺文書、總持寺文書、本誓寺文書、來迎寺文書等々)寄進狀の宛書に「觀音寺御本尊江」と記す(觀音寺文書二四・二四三・二四七)までに具體化された事實であつた。然もこれらは

「於此下地成違亂煩輩者深蒙三十番神并十罪□等御罰可爲彌不孝之者也云々」(同文書七一)

という觀念と「奉寄進御本尊間相當御廻向奉頼候」(同文書二七四)という觀念を基底としている事は申すまでもない。

而してかかる中世における寺社領に對する一般觀念が、その土地押領違亂に何等かの精神的な限界を與えずにおかなかつた事は想像に難くない。この事は、武家による寺社領の押領がいちじるしくゆがめられた形において爲されている事に依つても肯づける。

即ち興福寺領大和國豐國庄の土地濫妨の場合凶徒が特に神人と號し、<sup>⑧</sup>又元亨年間、加州山代庄の地頭吉谷五郎の子息虎犬丸が南禪寺領得橋郷内佐羅村亂入の節、佐羅別宮の神主と號して狼籍をなしている事によつても示される。<sup>⑨</sup>これは勿論、彼等が政治權力的に伸張せんが爲の

自己辯護であり、或は又、職所有の經濟的要求によるものでもあろうが、然し我々はこの事實を通してその基礎にひそむ神主・神人・神領に對する一般の時代的な觀念をよみとつてよからうし又、そうしたものの上に立つ武家行動の消極性を指摘してよからう。

以上、中世における神木神與神領觀について考え、その根強い宗教的權威にふれてみた。問題とする地頭大柔玄猷の白山社領における領主化が、白山の神與振りを契機として瓦解した事も、以上にみた如き神與の權威に依るものである事は言をまたない。而して此處で我々は地頭の思想内部にひめられている神與神領に對する宗教的威壓感が、その勢力伸張に基本的な限界となつた事を銘記すべきであらう。かかる神威に對する畏怖觀の克服思想が、自らの手でかちとられぬ限り、その領主化に如何なる社會條件のとのいがあつても、本質的な完成を望み得ぬものではなかつたらうか。然し一時的感情的な反抗は別として根本的な克服思想がかちとられるには相當長い歴史的經過が必要であつた。

この點次項に、そうした根強い神威の畏怖觀念を、根底より克服するに充分な内容をもつた親鸞教學就中その教義布教の動向について考えたい。

前項において、神木神輿神領觀が如何なるものであり、それが如何に中世人に大きな威壓を與えていたかについて若干言及して來たが、こうした觀念は申すまでもなく中世における神觀念を母胎とする。中世における神觀念とは、勿論古代以來の傳承觀念ではあるが、それは「歸依人隨而加壽福垂哀愍 渴仰益者副加彼契志極樂之堺御神二而御座候也」<sup>⑤</sup>という如く、その歸依人に對する恩寵によつて、切實に祈禱され、反面逃れ難い冥罰を課するものとして、強烈な畏怖心がいだかれるという二面性の内容とする。文明十年八月廿八日能登珠州郡高座宮の神主友永は、代官五井兵庫守が、高座宮方上之保庶子分の神田壹町を違亂して蒙つた冥罰を九ヶ條にわたつて註記している<sup>⑥</sup>。それに依れば、神領を違亂した谷屋三郎左衛門の兄弟親子三人は、極月十八日「こし足手ぬけ候て」死に、兵庫の父將監入道・林の子も相次いで死に、兵庫自身も切腹し、然も近くの從者さえ、それに氣付かなかつたと記している。この外、北からひかり物が飛び落ち兵庫の家をつぶした事、狐が夜晝の差別なく亂入した事、軒にゴマが生えこれを抜いても絶えなかつた事、生前兵

庫が神に、白羽の弓矢で喉をさされるを夢みた事、親の所へ禮物を出したが途中で失せた事等に至るまで、その不思議な神罰を掲げている。然もこの冥罰を「國中の事は申不及、他國までも風聞候」といいその社會的效果を表示している。かくて神の冥罰に對する畏怖觀念は、中世人の生活基底に深く入りこんでいた。そしてそこでは「正法興せざる時は、地神かうへをふる、これを地震という、邪法盛なる時は天神いきをふくこれを天變という也」<sup>⑦</sup>というが如く、天變も地異も總て神威の然らしむ所と信ぜられ、從つて「我靈驗をかくしなは諸神ことごとく化をやめむ、諸神の威おとらは國土はみなくらやみとなり衆生はみな父母にはなれたる子のことくなりはてむ云々」(大永神書)事を恐れ、これに勤仕した。

さて本地垂迹思想の理論的場になつ、かかる神威の宣布は、中世人の貧困な傳承思想に座をしめつつ、「我神殿のかたふくは、天下徳をとろふべき前相をしめすなり、我社壇の興隆するは國家の治るべき瑞相をあらわすなり」(大永神書)という神社側の立場を矛盾なく推進せしめた。

而して以上の様な世界にありては、その本地をいちぢるしく利益的に考え、從つてそれに對し祈禱的であつた

事は忘れられてならない。

今例を本地佛阿彌陀にとつて考える場合、一般的にそれに對しても、いちぢるしく祈禱的であつた。抑々白山神社本地佛中、阿彌陀はその數において最も多く、その中樞をしめたるかの觀があるが、この彌陀は白山においては、信仰的に他佛菩薩と全く同次元に位置するものであり、それに對する祈禱性は、「奥院佛體背面銘」によつてもうかがい得る。即ちそれには、

「白山禪定越南地大權現、御本地阿彌陀如來之御尊像於越前國大野郡靈應山平泉寺奉鑄者也 夫當尊之尋垂迹者、西方極樂國土之教主、窺本者妙覺究之竟之境界、實本果圓滿之尊體也、依之信心族者、惠日照曜而破三業諸塵 運貴輩者覺月清淨而拂六根諸垢 然則一天泰平萬邦清康、風雨順時、含生蒙潤別而信心大施主現世者武運長久諸願成辦當來者必至安養淨刹仍諸願之意趣如件」<sup>⑨</sup>

とあり、當來必至安養淨刹と共に現世の武運長久諸願成辦が願われている。

さてこうした阿彌陀佛に對する祈禱性を克服し、それを純粹信仰に高めんとするのは、當時親鸞教學を置いて他にその類例をみない。然らば親鸞の教學は如何に宣

布され傳承性の強い社會の思想信仰に如何に抵抗思想として作用して行つただろうか。

覺存時代以降に於ける眞宗の社會的進出が、否應なしに社會諸事象と對決せしめられ、ために談義本を中心として神佛關係に言及し、その教學を具體的に弘通して行つた事は周知の如くである。諸神本懷集、熊野教化集等において、當時既に一般思潮となつていた本地垂迹思想をとりあげ、然も舊佛教系において諸佛菩薩と同位置に祈禱的に宣布されて來た阿彌陀一佛をとりあげ、これを從來の本地の本地として確認し、もつてその教學的立場を振興した事については既に一、二所見を發表したが、<sup>⑩</sup>此處ではそうした克服思想を理論的に體形化した諸神本懷集等にみる阿彌陀觀それ自體についてではなく、その受容動向について考えたい。いうまでもなく、眞宗教義が中世民衆の生活指導に對し、如何程の規定性をもつたかについては、教義理論のみでは語り得ない。從來手のつけられなかつた教義受容の究明が此處に重要な課題として提案される。

而して、先に示した如き一般の阿彌陀觀を否定し、所謂祈禱的な念佛を報謝の念佛に高上せしめんとする眞宗

教學の立場を、平易に敘述した諸神本懷集・教化集等の完成はそれ自身高く評價されて然るべきであろうが、然しそれをもつてしても猶、根強い民衆の現實的な宗教要求を純化さすにはいちじるしい限界があつたと考える。

何故なれば、この事は思想或は佛教受容の一般的傾向ではあるが、民衆に受容される思想信仰は、その生活傳承を超絶し没個性的に受容されるものではなく常にその生活體驗や傳承思想の立場にたつて受容されるものであるからである。然も又その思想的特性は具體的であり、その迫る所は實體的である。大永神書に

「我神體は金剛不壞の法身なり、眞實は雷火にもやけず地震にもそこなわれざるなり、あさましや汝等朝夕に妙理權現と唱えながらしかも妙理の本體にまよえる事の云々」と云つてゐるが、この事はそのまま裏面に民衆の實體的な宗教觀を投影しているといつてよからう。

以上の如く考えるならば、眞宗の教義作用を受ける一般民衆の阿彌陀觀も、無條件に純粹なそれとして斷じざる事は早計であろう。元來、室町期特に蓮如以前に於ける一般社會への阿彌陀並に念佛の教義弘通は、種々なる型においてなされてゐた。今その中、重要な影響力をも

つたものとして、舊佛教の常行三昧堂系のもの、時宗系のもの、眞宗系のもの等を指摘しうるが、これらの作用效果は、以上に示した受容動向を重視する限り舊佛教的なものに通じたと考えられる。大永神書に

「吾身に急難のある時はかり神そ佛そとあはてふためにか おかしきそとよ」と云うが、これは純粹な阿彌陀信仰の教義布教を受けつつも猶、その危難に直面する場合、ともすれば神佛への祈禱的行動に出でざるを得なかつた民衆の動向と弱さを如實に示すものではなからうか。そしてそうある限り、親鸞教學の社會的確立と古代克服の思想的立場にいちじるしい障礙がよこたわつていたといふべきであろう。然らば、かかる状態にもかかわらず猶、眞宗の教團的擴大が着々實現して行くのは一體如何なる理由によるのであらうか。此處に教團人各個の信仰内容と共に、一方その社會史的動向が具體的に反省さるべき要を生ずる。

此處で我々は先ず、教團の擴大がそのまま本質的に、眞宗繁昌を語るものでなく、一人でも多く信をとるをその繁昌といつた蓮如の言葉を想起しつつ龐大な教團人の信仰内容を反省してみよう。

而して此の場合民衆の宗教的要求と傳承性を先述の如

く解するならば必然、眞宗教義に浴し、彌陀一佛への歸依と口稱を表しつつも猶民衆においては阿彌陀を神格的に感覺していなかつただらうかという疑問を生ずる。

熊野教化集において、薬師信仰を止揚する眞宗の立場として

「薬師如来トマウスハ阿彌陀佛ノ名ヲカヘカタチヲアラタメテ衆生ヲ方便シテ極樂ヘヲクリイレンカタメニアラハレタマヘルナリ」と云う論理を標榜しているが、この布教を受ける民衆の動向は、いわれる如く薬師を彌陀の垂迹として納得しつつも猶、彌陀の上に、薬師的な功能や靈驗を期待しなかつただらうか。勿論今、かかる民衆の受容内容を、鮮明に断定せしむる史料を缺いている。然し、彌七御書に「……當流ノ安心ノヤウ、カタノコトク聽聞仕イトイヘトモ國ヘカタリテ人ヲススメケルニサラニ人々承引セサルアヒタ……」というが、この不承引こそ、長い生活傳承の中でつちかつて來た民衆の呪術祈禱的宗教意識に起因するものと考え、こうした事からそれを類推するのは無理であらうか。様々な矛盾と不合理が然も生活的要求として力を有していた民衆の古い宗教思想の克服こそ、眞宗に課せられた唯一の使命ではあつたが、然し如上に依つてその困難性をよみとつて

よからう。

蓮如の強調する「諸神並佛菩薩等不可輕之事」(文明五年十一月掟)の掟に依つて示される民衆の動向は、あたかも諸神本懷集等の弘通効果をそのままに反映するかの如くみ得るが、以上考えた所よりすればその動向は、民衆に受容された功德圓滿な彌陀一佛の歸依による、對立的否定でしかあり得ない。そこには思想的な横すべりと空轉がみられても、何等の展開をも感じとられぬ。そしてそれ故にこそ、この一條には限りなき蓮如の苦惱と、教團人に對する複雑な胸中がひそめられている。

## 六

古來、加賀の土地の三ヶ一は白山領、三ヶ一は京家領、三ヶ一は富樫領と稱されて來たが、(白山問答)以上その内の白山領がその神的權威をもつて、對者特に地頭層に境界を與えて來た事に言及した。この事は逆に言えば、地頭自體その傳承的觀念として抱いた神觀念によつて自らの發展コースを、自らの手でつみとつてしまつたと言えよう。そしてこうした所に、白山神社が莊園統治の政治的矛盾をはらみつつも、その所領を比較的永く維持し得た要因があつたと考えられねばならない。

從來、古代莊園の殘存を、在地武家群の無制限なる勢力伸張を危惧する中央武家政權のあり方から政治史的に解する見解が多かつたが、以上に言及した如く舊莊園領主の殘存を、その主動的な政策や又、對者の思想的限界の中からも尋ねらるべき事が明白となつた。

然しこの様にして、長き支配をつづけ得た白山社領も中世末期に至つていちじろしくせばめられ終に崩壞の段階に至つた。

強い宗教的權威を、武器に先行させた白山統治の瓦解は申すまでもなく、その支配立場を封建的な支配體制にまで、展開せしめ得なかつた事に依つたであろうが他面先にもふれた如き神社側の反省もその理由の一として注意すべきであろう。言う所の反省とは、神輿振りに對する倫理的なそれではなく、本質的には神官神人等自身の神威に對する畏怖心より出發するそれである。正長二年三月、白山の四講講衆若衆等は、造宮段米未濟をいきどおりて一味神水し、三十講以下の諸講説を斷絶して守護代並に上使飯尾新左衛門に對し宗教的威壓を加えんとしたが、然も猶、

「乍去冥一依難計廿五日當日講問<sup>(問カ)</sup> 潜<sup>ニ</sup>於理觀院令勤仕了  
先達三人一略」

とある如く、冥罰に對する畏怖によつてその斷絶を貫き得なかつた(白山宮庄嚴講中記錄 若衆講衆等の抵抗にみるかかる矛盾を、神社側がその立場としてもつ限り、それがなす神輿振りも、それを政治的威壓とし機械的に驅使し得るものではなかつた。冥罰は常に對者にのみ課せられるものではなく、事あらば神人等自身にも課せられるという認識と畏怖は、従つて理不盡の神輿振りを自らの觀念をもつて阻止せしめるものでもあつた。而してかかる動向にありては、神輿振りは、その威力を純粹政治力として十全に發揮し得ぬ限界を、その内面にふくむものであつた。こうした複雑な神輿振りの歴史的内容に、それを行使する人々の組織的不調が加わる場合、如何にその權威を失墜せざる神輿といえども、必然歴史の潮流から影をひそめねばならぬものであつた。さて以上の様な理由によつて、次第にその弱體化を露呈する白山に對し當時よりやく強固さを加うるに至つた眞宗教團の集團組織は、終にその政治勢力を瓦解せしむる根本的な力となつて出現したのである。

泣く子もやましめた地頭を惱ました白山の宗教的制裁を、瓦解にみちびいた眞宗教團の集團力のたくましさは申すまでもあるまいが、然しこの事實をもつて、直ちに

眞宗による舊思想の克服を示そうとするものではない。

眞宗教義の實質的な弘通と、それに依る民衆の思想確立なくしては、純粹の古代性克服は望み得べくもない。この點、土豪農民層聯合の一揆的勝利と眞宗門徒の實質的な完成は、歴史的には二に分別して分析すべきであろう。

こうした事から云えば、天文頃にみる白山の本願寺に對する歩みよりや長吏の迎合的態度は、成程その政治的敗北に根ざすものではあるが、然しそれが教示した呪術祈禱的念佛や阿彌陀觀の克服なき民衆を、眞宗の教團が含擁する限り、宗教としての白山の敗北はあり得なかつたと言ひ得よう。

かくて、民衆の思想確立をめざす眞宗の教學活動は、その受容動向の停滯性の故に、依然として難課題をはらみつつたゆみなき努力がはらわれねばならなかつた。正に蓮師の教學活動における實踐苦惱も本質的にはこの一點にすえられて考察されねばなるまい。然し今は唯、こうした歴史的變遷の中で、歴史事象は、常にその内部に相剋矛盾を含みつつ、多様な形態で發展し、決して單なる對立を通して勝敗を決し、もつて一本道を寫進するものでない事を再確認するにとどめておく。

## 註①

網野善彦「若狹における封建革命」歴史評論五の一

② 稻垣泰彦「日本における領主制の發展」歴史學研究第一四九號

③ 松本新八郎「南北朝内亂の諸前提」

永原慶二「日本における封建國家の形態」(『國家權力の諸段階』所收)

同 「日本封建社會論」

④ 安田元久「下地中分論」史學雜誌六十二ノ一

⑤ 當地は舊、富奥村に屬していたが、昭和三十年四月一日野々市町に編入した。

⑥ 林六郎光明は當地に居すると共に一方越前吉田郡藤島の地頭職を有し又守護たりし事もある。然しその一流加賀に榮え、安田、山上、横江、近岡の諸氏皆これより分流す。

⑦ 上林郷を中心として三十町以内には、富樫二郎家直の弟家忠の居した額谷があり、又林新介の子倉光六郎成澄・成資・成宗・光資等が次第居館した倉光がある。更に一里以内には富樫七世家國以來、同氏の本據として、長享二年政親の敗れるまで加州の鎌倉として榮えた野々市がひかえ、又西方には林貞光の二男松任十郎範光以降の居館たる松任がある。又一里十町以内には、富樫家明・家元等の久安、押野殿と名のる富樫家善の押野、林光明の五男横江基光・光利・光房等の横江、富樫家家老槻橋氏の本據槻橋(月橋)等をひかえ、富樫一族の本場として注目さるべき地域である。



- ⑧ 白山宮庄殿證中記錄
- ⑨ 安元三年の神興振りについて、百練抄は改年號、「治承元年」と記し、平家物語は安元二年とす。
- ⑩ 白山比咩神社文書
- ⑪ 興福寺略年代記、祐春記、春日權現驗記(十九)
- ⑫ 滿濟准后日記、東寺執行日記、看聞日記
- ⑬ 石母田正「中世的世界の形成」P2—4
- ⑭ 近江觀音寺文書、六・二四・二三・二四・二四・二六・二七・二八・  
一三・一〇〇・一〇一・二六・二四〇・二四一・二四二・二四三・二四・  
一三一・一〇〇・一〇一・二六・二四〇・二四一・二四二・二四三・二四・  
二四・二四・二四・二九・二六・二四
- 總持寺文書 應安元年三月廿日寄進狀
- 本誓寺文書(能州) 永正九年二月廿八日付文書
- 來迎寺文書(能州) 康應元年二月十五日寄進狀
- 春日神社文書四四八號、嘉祿三年八月平重康解狀
- ⑮ 溫故古文抄
- ⑯ 文明八年九月付 重藏神社文書
- ⑰ (珠州)須々神社文書
- ⑱ 大永神書(白山比咩神社文書)
- ⑲ 明治七年「白山下山佛目錄」に依れば、下山佛の内、阿彌陀四・十一面觀音二・地藏二・勢至一・泰澄一・役行者一・觀音一・小佛像一・金佛一と記している。
- ⑳ 奥院佛體背面銘には更に「文政五年三月 大施主 南越勝山城主 從五位下小笠原桓模守源朝臣長實」の銘あり。
- ㉑ 拙稿「熊野敎化集について」
- 「原文の校異とその解説」 大谷史學第四號
- 同 「本願寺中興の場について」 大谷大學時報第十一號
- ㉒ 富山縣城端別院善德寺藏